

# 「伝統」・移住・文化再創造 —現代のマオリタンガ—

名古屋大学大学院文学研究科

人文学専攻 文化人類学・宗教学・日本思想史専門

神山 歩未

## 目次

第1章 序論	第5章 都市で暮らすマオリの民族誌
第2章 研究方法と調査地概要	第6章 資源管理をめぐる新たな運動
第3章 マオリ社会史	第7章 考察
第4章 マラエの変遷過程における「伝統 的」文化の再創造	第8章 結論

## 目的

本論は、都市で暮らすマオリの日常と文化的な実践に見られる「マオリらしさ」を明らかにし、マオリタンガの現代的展開について考察することを目的としている。

## 問題の所在

ニュージーランドの先住民とされるマオリ *Māori* は植民地化に伴う同化政策により人口が激減し文化を崩壊の危機を迎えるに至った歴史的経緯を有する。1920年代頃、ヨーロッパ系の白人入植者による同化政策や統合政策に対し、白人の高等教育を受けたマオリの若者らはマオリ文化を復興させようとマオリの文化と「伝統」の再構築を行った。当時、文化復興運動を先導した1人はマオリの文化復興の文脈で「マオリタンガを固く持っている (Hold fast to your *Maoritanga*)」と喚起した。マオリタンガとは「マオリらしい」日常とマラエに関連する「伝統的」文化・知識・価値観などを広く包括したマオリ文化全般を指す。それゆえ実態が掴みにくだけでなく、そこには先鋭的な先住民運動を展開するマオリであるがゆえの問題が生じている。「マオリタンガ」という語が登場した1920年代は本来の居住地であった部族の領域から都市に移住するマオリが徐々に現れ始めマオリ社会が大きく変化し始めた時期である。そのためマオリタンガは当時の社会的変化や状況をうけ創出された語であると考えるのが妥当である。そして現代では現代的状況をうけて新たな展開があると予測できる。しかし昨今の傾向として、マオリ・エリートによって「正統」な「伝統」と位置付けられる文化的行為や概念が唯一絶対の「伝統的」文化であると位置付けられており、それ以外はまがいものとして捨象されていることが指摘できる。この背

景には土地権など実質的な法的権利獲得を目指した文化の戦略的な本質主義的自文化表象すなわちアイデンティティ・ポリティクスが指摘できるが、このような現地の本質主義的自文化表象は多様性を認めず、文化が一枚岩に語られるという問題を抱えている。すなわち特定の文化的行為や概念のみを「本物」と位置付けることによりマオリタンガの現代的な展開をさらに捉えにくくしている可能性が指摘できる。

そこで本論ではエリート・マオリによる本質主義的言説を相対化しつつ現代のマオリタンガを明らかにするために、1) 現在のマオリ社会を生起した歴史的経緯、2) マラエの再創造過程、3) 都市で暮らすマオリの民族学的調査、4) 近年の環境保護運動に伴う権利獲得運動の分析、の4点から考察を行った。

## 構成

本論文は8章から構成される。第1章では序論として本論の問題の所在と視座を示す。続く第2章では研究方法と調査地の概要、マオリ社会の概要について述べる。第3章では現在のマオリ社会を生起した歴史的経緯を明らかにするため、マオリ社会の歴史を概観する。その際、「本物」と「偽物」といった言説がどのように生まれたのか、「本物」と「偽物」に代表される(再)部族化と汎マオリ化の動きに着目し、そしてマオリ社会内部ではどのように(再)部族化と汎マオリ化が展開されてきたのか論じる。第4章では、第3章で概観したマオリ社会内部の歴史的変遷を踏まえつつ、マオリ文化の象徴とされているマラエに焦点を当て、(再)部族化と汎マオリ化を揺れ動く中で、マラエがマオリ文化の物質的象徴やマオリ・アイデンティティの拠り所となっていく経緯について論じる。第5章では、民族誌として「まがいもの」とされる都市マオリ・コミュニティの文化的な実践について記述する。加えて、その都市マオリ・コミュニティに所属する南オークランド在住のマオリ家族の事例から、マオリの拡大家族の日常と生活の中にみられる文化的な実践について記述する。さらに、都市への移住という経験を国内のみの限定された構図の中だけで捉えるのではなく、エリート・マオリが想定した本質化されたマオリ像に縛られず、また先住民主張とも関わらないオーストラリアに移住したマオリの文化的な実践についても記述する。より開放的なマオリらしさが表出すると思われるオーストラリアにおける彼らの文化的な実践を明らかにし、ニュージーランド国内での動向と合わせて現代に生きるマオリが展開する文化的な実践の特徴を明らかにする。つづく第6章では、マオリタンガの現代的な展開の例として、現代の環境保護思想に依拠した土地権回復運動について記述する。そして環境保護運動が活発化するなかで、彼らが想像上の生き物を切り札に環境保護という西洋的な価値観や法制度まで活用しながら主流社会にマオリの世界観を主張する契機を創りだ

したことを論じる。以上を踏まえ第7章ではマオリタンガの現代的展開について考察を行い、終章で結論と今後の展望について述べる。

## 結論

本論から明らかになったのは以下の三点である。

### 1) 重層的なつながり

本論で焦点化した都市で生活を営むマオリは、都市移住によってマオリとしてのアイデンティティや出身地への帰属を失った人々ではなく、都市的環境である西欧近代化に対応しながらマオリとしてのアイデンティティを手放すことなく現代を生活している人々であった。そして都市において新たなハブとでもよべる集団を形成し、地縁的なつながりを有した相互扶助的関係のあるコミュニティを再形成している。一方で、地方の出身地においてはエリート・マオリが「正統」な「伝統的」と位置付ける部族集団とのつながりを再形成している。地方から都市に移住し都市で生活を営むマオリは、地方と現在の居住地をまたがり重層的なつながりを形成していた。

### 2) マオリタンガの現代的展開

本論で都市マオリと呼ばれる人々は、都市移住によってマオリとしてのアイデンティティや出身地への帰属を失った人々ではなく、都市的環境である西欧近代化に対応しながらマオリとしてのアイデンティティを手放すことなく現代を生活している人々であった。彼らの文化的な実践はエリート・マオリからすると「正統」な「伝統」ではない実践として非難されているが、彼らの行動原理は、コミュニティの構成員それぞれが有してきた文化的な知識であり、ファカパパを基礎に都市的環境に合わせて再解釈したマオリの「伝統的」文化、すなわちマオリタンガの現代的展開である可能性が指摘できる。

都市に移住したマオリによる文化的な実践は新たな現象ではなく、エリート・マオリらにより「伝統的」部族集団に所属する「正統」なマオリのマオリタンガとしてすでに報告されている実践とも共通性を有する。重要なのはこのような実践をエリート・マオリによって「伝統的」部族集団へのつながりのないマオリというイメージが付与された都市に移住したマオリらが実践している点である。それはこれはまでの「都市マオリ」が有してきた「伝統的」ではないというイメージを覆す。マオリタンガは、マラエに代表される物理的な形式よりも行為や精神自体を指し、状況と環境に合わせて展開されるものであると考えられる。過去も現在もマオリ社会の動態は一枚岩ではなく、多様な諸集団を編纂しつつ「伝統」を再解釈することによって迫り来る変化に柔軟に対応しているのである。

### 3) アイデンティティ・ポリティクスとの折り合い

「伝統的」部族集団と都市マオリを多配列の同じ線上のカテゴリーとしてみなすと、両者は相反する存在なのではない、ということが明らかになった。伝統的かそうでないのかを決めるのは、どういった状況や目的でマオリがアイデンティティを主張しているのかによって異なる存在であるかのように見えているだけという可能性が指摘できる。アイデンティティ・ポリティクスと折り合いをつけるには、本論で試みたようにエリート・マオリが編み出す言説と現代に生きるマオリの多様な日常を多配列に繋ぎあわせ、そのつながりを考えることが重要なのではないだろうか。

### 今後の課題

今後の課題として、本論で明らかにした事例が今日の都市で生活を営むマオリが全体を表象しうるのか検討することがあげられる。本論で取り上げたファーナウと類似する特徴を有する同地域に暮らすファーナウとの比較、異なる地域に暮らす同イウイ出身ファーナウとの比較、さらに異なる地域や異なるイウイとの比較を通して、他の都市で生活を営むファーナウも本論で示したファーナウのように重層的なつながりを形成しているのか、どのように文化的な実践をおこなっているかなど、民族誌的記述をもとに実証的に検討を深めていく必要があると考える。それは西欧近代化により変化を迫られる中で文化的アイデンティティと「伝統的」な文化をどのように維持し継承していくのかという問題の解決策を探る上で、マオリを例に現代における「伝統的」文化の捉え方の一つのモデルとして提供できる可能性を秘めていると考える。